

幾何入門 第11回



情報科学科 金子 晃

Алексей КАМЕНКО

kanenko@is.ocha.ac.jp

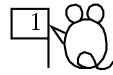
この講義のホームページ:

<http://atom.is.ocha.ac.jp/~kanenko/KOUGI/Geo>

この講義のホームディレクトリ:

edusv.edu.is.ocha.ac.jp/~kanenko/Geo

第6章 Riemann 幾何学



3次元空間内の曲面や曲線の曲がり方の考察は、普通は今まで述べて来たような、曲面を外から見たときの曲がり具合のこと

しかし、曲面の上で生活している生物にとっては、自分の空間の曲がり具合はこれとは別の感じ方になる。

例：一次元の国では、

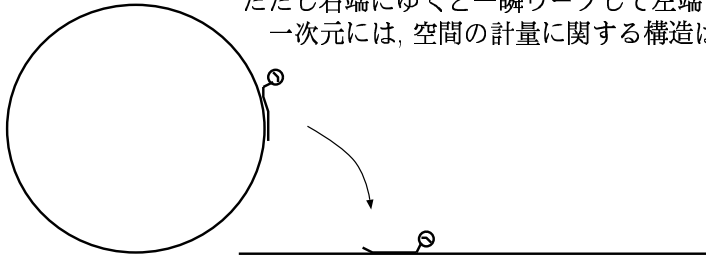
円周 $S = \{x^2 + y^2 = 1\}$ は外から (i.e. 平面曲線として) 見ると曲率を有する。

しかし、円周の上に閉じ込められて外の世界が見えない生物にとっては、自分の世界は少しも曲がっていない。

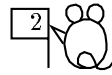
線分 $[0, 2\pi]$ の両端点を同一視したものと全く同じ。

ただし右端にゆくと一瞬ワープして左端に居る。

一次元には、空間の計量に関する構造は何もない。

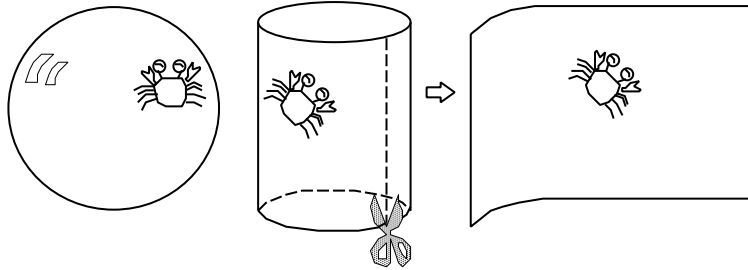


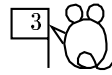
例：3次元の中の曲面の場合、



球面上に生活する生物は、
たとえその外の3次元の世界から自分達の国を眺める機会が無くても、
自分達の世界が曲がっていることが感じられる。

例えば、3角形の内角の和を計算すると π より大きくなることが観察できる。
これに対し、円柱の表面は3次元から見ると曲がっているが、その上の生物は
平らな面の上で暮らしていると思うだろう。





3次元空間内の曲面については、
第一基本形式よりも第二基本形式の方が
曲面の曲がり具合を良く表しているように見えたが、
曲面に固有な曲がり方を表すのは、むしろ第一基本形式、すなわち弧長の方。

一般に、 n 次元の C^∞ 級多様体 M があるとき、
その上の正値対称2次微分形式

$$\sum_{i,j=1}^n g_{ij}(x) dx^i dx^j \quad (g_{ij} = g_{ji})$$

を M 上の Riemann 計量と呼ぶ。
座標変換は2次共変対称テンソルとして扱う。

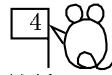
これは M 上に距離を定める：

線素： $ds^2 = \sum_{i,j=1}^n g_{ij}(x) dx^i dx^j$ ，
曲線弧 $x = \varphi(t)$, $0 \leq t \leq T$ の長さは

$$L = \int_0^T \sqrt{\sum_{i,j=1}^n g_{ij}(\varphi(t)) \frac{d\varphi^i(t)}{dt} \frac{d\varphi^j(t)}{dt}} dt$$

では、 M 上の二点 P, Q の距離を、測る経路を指定せずに定められるか？

測地線



M 上の二点 P, Q を決めるとき、これらを結ぶ M 上の最短曲線弧のことをこれらの点を通る測地線 (geodesic) と呼ぶ。
測地線に沿って測った長さが二点 P, Q の距離。

ある曲線が測地線かどうかは局所的に定まる。
(逆に測地線は最長弧になることも有る.)

測地線の例は球面上の大円弧 (geodesic の語源!)

二点 P, Q が十分に近ければ、最短経路は短い方の大円弧に決まる。

北極と南極の場合は無数に有る \implies 大域理論は難しい。

そこで、まず局所理論をやる。

以下、曲線弧の両端点 P, Q は同一座標近傍内にあるとする。

二点 P, Q を時刻 $t = 0, t = T$ で通過するすべての径路の中で、長さが最短のものを $x = \varphi(t)$ とする。

このとき、 $\psi(0) = \psi(T) = 0$ なる任意の函数ベクトル $\psi(t)$ と

任意の ε に対し、

$\varphi(t) + \psi(t)$ ($0 \leq t \leq T$) に沿う長さ $\leq \varphi(t) + \varepsilon$ ($0 \leq t \leq T$) に沿う長さ

i.e.

$$\begin{aligned}
& \int_0^T \sqrt{\sum_{i,j=1}^n g_{ij}(\varphi(t)) \frac{d\varphi^i(t)}{dt} \frac{d\varphi^j(t)}{dt}} dt \\
& \leq \int_0^T \sqrt{\sum_{i,j=1}^n g_{ij}(\varphi(t) + \varepsilon\psi(t)) \frac{d(\varphi^i(t) + \varepsilon\psi^i(t))}{dt} \frac{d(\varphi^j(t) + \varepsilon\psi^j(t))}{dt}} dt \\
& = \int_0^T \sqrt{\sum_{i,j=1}^n g_{ij}(\varphi(t)) \frac{d\varphi^i(t)}{dt} \frac{d\varphi^j(t)}{dt}} dt \\
& \quad + \int_0^T \frac{\sum_{i,j=1}^n \sum_{k=1}^n \frac{\partial g_{ij}}{\partial x_k} \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt} \psi^k + \sum_{i,j=1}^n g_{ij} \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\psi^j}{dt} + \sum_{i,j=1}^n g_{ij} \frac{d\varphi^j}{dt} \frac{d\psi^i}{dt}}{2 \sqrt{\sum_{i,j=1}^n g_{ij}(\varphi(t)) \frac{d\varphi^i(t)}{dt} \frac{d\varphi^j(t)}{dt}}} dt \cdot \varepsilon
\end{aligned}$$

+ $o(\varepsilon)$

ここで対称性 $g_{ij} = g_{ji}$ を用いて分子の最後の二つの項をまとめると

$$\begin{aligned}
& = \int_0^T \sqrt{\sum_{i,j=1}^n g_{ij}(\varphi(t)) \frac{d\varphi^i(t)}{dt} \frac{d\varphi^j(t)}{dt}} dt \\
& \quad + \int_0^T \frac{\sum_{i,j=1}^n \sum_{k=1}^n \frac{\partial g_{ij}}{\partial x_k} \frac{d\varphi^i(t)}{dt} \frac{d\varphi^j(t)}{dt} \psi^k + 2 \sum_{i,j=1}^n g_{ij}(\varphi(t)) \frac{d\varphi^i(t)}{dt} \frac{d\psi^j(t)}{dt}}{2 \sqrt{\sum_{i,j=1}^n g_{ij}(\varphi(t)) \frac{d\varphi^i(t)}{dt} \frac{d\varphi^j(t)}{dt}}} dt \cdot \varepsilon
\end{aligned}$$

+ $o(\varepsilon)$

任意符号を持つ微小な ε に対しこの不等式が常に成り立つためには、 ε の一次項の係数 (変分) が消えなければならない:

$$\Delta := \sqrt{\sum_{i,j=1}^n g_{ij}(\varphi(t)) \frac{d\varphi^i(t)}{dt} \frac{d\varphi^j(t)}{dt}} \quad \text{と置けば}$$

$$\int_0^T \left(\frac{1}{2\Delta} \sum_{i,j=1}^n \sum_{k=1}^n \frac{\partial g_{ij}}{\partial x_k} \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt} \psi^k + \frac{1}{\Delta} \sum_{i,j=1}^n g_{ij} \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\psi^j}{dt} \right) dt = 0$$

これが任意の $\psi(t)$ について成立より $\varphi(t)$ が満たす条件を求める.

括弧内の第2項において動く添え字 j を k に書き換え,

更に $\psi(t)$ についての微分を部分積分で移す ($\psi(0) = \psi(T) = 0$):

$$\begin{aligned} & \int_0^T \left\{ \frac{1}{2\Delta} \sum_{i,j=1}^n \sum_{k=1}^n \frac{\partial g_{ij}}{\partial x_k} \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt} \psi^k - \sum_{i,k=1}^n \frac{d}{dt} \left(\frac{1}{\Delta} g_{ik} \frac{d\varphi^i}{dt} \right) \psi^k \right\} dt \\ &= \sum_{k=1}^n \int_0^T \left\{ \frac{1}{2\Delta} \sum_{i,j=1}^n \frac{\partial g_{ij}}{\partial x_k} \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt} - \sum_i \frac{d}{dt} \left(\frac{1}{\Delta} g_{ik} \frac{d\varphi^i}{dt} \right) \right\} \psi^k dt \\ &= 0 \end{aligned}$$

$\psi^k(t)$ は $\psi^k(0) = \psi^k(T) = 0$ を満たす以外は任意の函数だから,

変分法の基本原理により, 被積分函数のそれに掛かっている部分 $\{ \} = 0$.

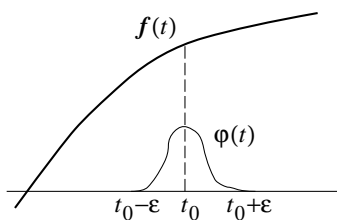
∞ 変分法の基本原理: 連続函数 $f(t)$ が $\psi(0) = \psi(T) = 0$ なる任意の C^∞ 級函数 $\psi(t)$ に対して

$$\int_0^T f(t) \psi(t) dt = 0$$

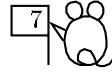
を満たすなら, $f(t) \equiv 0$.

∴ 例えば $f(t_0) > 0$ とすると, $t_0 - \varepsilon \leq t \leq t_0 + \varepsilon$ で $f(t) > 0$.

そこで, $\psi(t) \geq 0$ を $\psi(t_0) > 0$ かつこの区間の外では 0 となるように選べば, 上の積分値 > 0 となり, 仮定に反する.



∴



$$\frac{1}{2\Delta} \sum_{i,j=1}^n \frac{\partial g_{ij}}{\partial x_k} \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt} - \sum_{i=1}^n \frac{d}{dt} \left(\frac{1}{\Delta} g_{ik} \frac{d\varphi^i}{dt} \right) = 0$$

これは変分法の一般論で Euler-Lagrange の微分方程式と呼ばれるもの
このまま計算を続けるのはものすごく大変なので、
普通は次のように工夫する：

我々が求めているのは曲線の跡であって、パラメータ表示までは決まらない。
パラメータを取り替えても曲線の弧長は変わらないから！

そこで、パラメータは弧長パラメータの定数倍と仮定してしまう。
(弧長パラメータ自身にしてしまうと、パラメータの両端点 0 と T を
固定して比較できなくなるので、弧長に比例すると仮定するのである。)

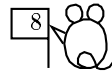
すると、各曲線上で、曲線に応じて定まる定数 C が有って、
 $ds = \Delta dt = C dt$ i.e. $\Delta = C$ (曲線に沿って定数)

よって上の式で Δ は $\frac{d}{dt}$ をすり抜けて外に出るので、

$$\frac{1}{2} \sum_{i,j=1}^n \frac{\partial g_{ij}}{\partial x_k} \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt} - \sum_{i=1}^n \frac{d}{dt} \left(g_{ik} \frac{d\varphi^i}{dt} \right) = 0$$

従って

$$\sum_{i=1}^n g_{ik} \frac{d^2\varphi^i}{dt^2} = \frac{1}{2} \sum_{i,j=1}^n \frac{\partial g_{ij}}{\partial x_k} \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt} - \sum_{i,j=1}^n \frac{\partial g_{ik}}{\partial x^j} \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt}$$



$$\begin{aligned} & \sum_{i=1}^n g_{ik} \frac{d^2 \varphi^i}{dt^2} \\ &= \frac{1}{2} \sum_{i,j=1}^n \frac{\partial g_{ij}}{\partial x_k} \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt} - \sum_{i,j=1}^n \frac{\partial g_{ik}}{\partial x^j} \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt} \\ &= \frac{1}{2} \sum_{i,j=1}^n \frac{\partial g_{ij}}{\partial x_k} \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt} - \frac{1}{2} \sum_{i,j=1}^n \frac{\partial g_{ik}}{\partial x^j} \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt} - \frac{1}{2} \sum_{i,j=1}^n \frac{\partial g_{jk}}{\partial x^i} \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt} \\ &= -\frac{1}{2} \sum_{i,j=1}^n \left(\frac{\partial g_{ik}}{\partial x^j} + \frac{\partial g_{jk}}{\partial x^i} - \frac{\partial g_{ij}}{\partial x_k} \right) \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt}, \quad k = 1, \dots, n \end{aligned}$$

ここで、行列 (g_{ij}) の逆行列を (g^{ij}) と置き、左から掛ける、すなわち、上の式の両辺に g^{kl} を掛けて $k = 1, \dots, n$ について加えれば、整理して

$$\frac{d^2 \varphi^l}{dt^2} = -\frac{1}{2} \sum_{i,j=1}^n \sum_{k=1}^n g^{kl} \left(\frac{\partial g_{ik}}{\partial x^j} + \frac{\partial g_{jk}}{\partial x^i} - \frac{\partial g_{ij}}{\partial x_k} \right) \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt}, \quad l = 1, \dots, n$$

Riemann 幾何学では、

$$\Gamma_{k,ij} := \frac{1}{2} \left(\frac{\partial g_{ik}}{\partial x^j} + \frac{\partial g_{jk}}{\partial x^i} - \frac{\partial g_{ij}}{\partial x_k} \right), \quad \Gamma_{ij}^l := \sum_{k=1}^n g^{kl} \Gamma_{k,ij}$$

と置き、Christoffel の 3 添字記号と呼ぶ (テンソルではない)。

対称性：

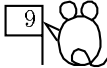
$$\Gamma_{k,ij} = \Gamma_{k,ji}, \quad \Gamma_{ij}^k = \Gamma_{ji}^k$$

この記号を使うと、測地線の方程式は (最終的に l を k と書き直して)

$$\frac{d^2 \varphi^k}{dt^2} + \sum_{i,j=1}^n \Gamma_{ij}^k \frac{d\varphi^i}{dt} \frac{d\varphi^j}{dt} = 0, \quad k = 1, \dots, n$$

という連立常微分方程式になる。

Γ_{ij}^k にも $x = \varphi(t)$ が代入されるので、これは猛烈に複雑な非線型連立方程式であり、めったに解けない!

測地線の常微分方程式は、 $\varphi(0)$ と $\varphi'(0)$ を初期値として  与えれば、解が少なくとも局所的には一意に定まる。

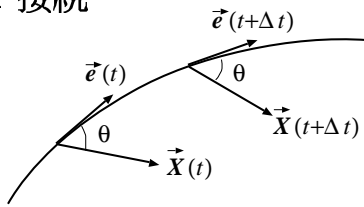
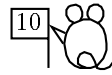
我々はこの方程式を、パラメータ t が弧長に比例すると仮定して導いたが、この方程式の勝手な解はその条件を満たしているであろうか？

$$\begin{aligned} & \frac{d}{dt} \sum_{i,j=1}^n g_{ij}(\varphi(t)) \dot{\varphi}^i(t) \dot{\varphi}^j(t) \\ &= \sum_{i,j,k=1}^n \frac{\partial g_{ij}}{\partial x^k} \dot{\varphi}^i(t) \dot{\varphi}^j(t) \dot{\varphi}^k(t) \\ &+ \sum_{i,j=1}^n g_{ij} \ddot{\varphi}^i(t) \dot{\varphi}^j(t) + \sum_{i,j=1}^n g_{ij} \dot{\varphi}^i(t) \ddot{\varphi}^j(t) \\ &= \sum_{i,j,k=1}^n \frac{\partial g_{ij}}{\partial x^k} \dot{\varphi}^i(t) \dot{\varphi}^j(t) \dot{\varphi}^k(t) \\ &- \sum_{i,j=1}^n g_{ij} \sum_{k,l=1}^n \Gamma_{kl}^i \dot{\varphi}^k(t) \dot{\varphi}^l(t) \dot{\varphi}^j(t) - \sum_{i,j=1}^n g_{ij} \sum_{k,l=1}^n \Gamma_{kl}^j \dot{\varphi}^k(t) \dot{\varphi}^l(t) \dot{\varphi}^i(t) \\ &= \sum_{i,j,k=1}^n \left(\frac{\partial g_{ij}}{\partial x^k} - \sum_{l=1}^n g_{lj} \Gamma_{ki}^l - \sum_{l=1}^n g_{il} \Gamma_{kj}^l \right) \dot{\varphi}^i(t) \dot{\varphi}^j(t) \dot{\varphi}^k(t) \end{aligned}$$

ここで () 内は

$$\begin{aligned} & \frac{\partial g_{ij}}{\partial x^k} - \Gamma_{j,ki} - \Gamma_{i,kj} \\ &= \frac{\partial g_{ij}}{\partial x^k} - \frac{1}{2} \left(\frac{\partial g_{kj}}{\partial x^i} + \frac{\partial g_{ij}}{\partial x^k} - \frac{\partial g_{ki}}{\partial x^j} \right) - \frac{1}{2} \left(\frac{\partial g_{ki}}{\partial x^j} + \frac{\partial g_{ji}}{\partial x^k} - \frac{\partial g_{kj}}{\partial x^i} \right) = 0 \end{aligned}$$

Levi-Civita 接続



測地線を手がかりに、空間のねじれ具合を読み取る。

測地線が直線だと思つと、測地線の接線はすべて互いに平行なはずである。

今、測地線 $\varphi(t)$ に沿うベクトルの平行移動作用素を $\tau(t)$ と書くと、

ベクトル場 $X = \sum_{i=1}^n \xi^i \frac{\partial}{\partial x^i}$ の測地線に沿う変化率は、 $Y = \varphi'(0)$ として

$$\begin{aligned} \nabla_Y X &:= \lim_{t \rightarrow 0} \frac{\tau(t)^{-1} X(\varphi(t)) - X(\varphi(0))}{t} \\ &= \sum_{i=1}^n \frac{d\xi^i(\varphi(t))}{dt} \frac{\partial}{\partial x^i} + \sum_{i=1}^n \xi^i \lim_{t \rightarrow 0} \frac{\tau(t)^{-1} \frac{\partial}{\partial x^i} - \frac{\partial}{\partial x^i}}{t} \end{aligned}$$

最後の極限は、 X の変化ではなく、空間のねじれに起因する。今、これを

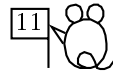
$$\lim_{t \rightarrow 0} \frac{\tau(t)^{-1} \frac{\partial}{\partial x^i} - \frac{\partial}{\partial x^i}}{t} = \sum_{k=1}^n A_i^k \frac{\partial}{\partial x^k}$$

と置き、未定係数法で A_i^k を決定する。

仮定により、 $X = \varphi'(t) = \sum_{i=1}^n \dot{\varphi}^i(t) \frac{\partial}{\partial x^i}$ が測地線の接線ベクトルのときは

$$\begin{aligned} \lim_{\Delta t \rightarrow 0} \frac{\tau(t)^{-1} X(\varphi(t)) - X(\varphi(0))}{\Delta t} &= \sum_{i=1}^n \frac{d\dot{\varphi}^i(t)}{dt} \frac{\partial}{\partial x^i} + \sum_{i,k=1}^n \dot{\varphi}^i A_i^k \frac{\partial}{\partial x^k} \\ &= \sum_{k=1}^n \ddot{\varphi}^k(t) \frac{\partial}{\partial x^k} + \sum_{i,k=1}^n \dot{\varphi}^i A_i^k \frac{\partial}{\partial x^k} = 0 \end{aligned}$$

これを測地線の方程式と比較して



$$\therefore \sum_{i,j=1}^n \Gamma_{ij}^k \dot{\varphi}^i \dot{\varphi}^j = \sum_{i=1}^n \dot{\varphi}^i A_i^k, \quad k = 1, 2, \dots, n$$

これが、任意の測地線 $\varphi(t)$ について成り立つような A_i^k は無数に有るが、 A_i^k の φ に関する一次部分もまた上を満たすので、最初から $A_i^k = \sum_{j=1}^n a_{ij}^k \dot{\varphi}^j$ と仮定するのが自然。

ここで a_{ij}^k を、 i, j について対称と仮定すると、 $a_{ij}^k = \Gamma_{ij}^k$ に確定する。

従って、

$$\begin{aligned} \nabla_Y X &= \sum_{k=1}^n \frac{d\xi^k(\varphi(t))}{dt} \frac{\partial}{\partial x^k} + \sum_{i,j,k=1}^n \xi^i \Gamma_{ij}^k \dot{\varphi}^j(0) \frac{\partial}{\partial x^k} \\ &= \sum_{j,k=1}^n \frac{\partial \xi^k}{\partial x^j} \dot{\varphi}^j(0) \frac{\partial}{\partial x^k} + \sum_{i,j,k=1}^n \Gamma_{ij}^k \xi^i \dot{\varphi}^j(0) \frac{\partial}{\partial x^k} \end{aligned}$$

$Y = \dot{\varphi}(0)$ は任意のベクトル場 $\sum_{j=1}^n \eta^j \frac{\partial}{\partial x^j}$ としてよいから、

$$\nabla_Y X = \sum_{j,k=1}^n \frac{\partial \xi^k}{\partial x^j} \eta^j \frac{\partial}{\partial x^k} + \sum_{i,j,k=1}^n \Gamma_{ij}^k \xi^i \eta^j \frac{\partial}{\partial x^k}$$

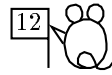
これをベクトル場 X のベクトル場 Y に沿う共変微分と呼ぶ。

特に、

$$\nabla_{\partial/\partial x^j} \frac{\partial}{\partial x^i} = \sum_{k=1}^n \Gamma_{ij}^k \frac{\partial}{\partial x^k}$$

これが Christoffel 記号の意味である。

Riemann 多様体の曲率



Riemann 計量 $\sum_{i,j=1}^n g_{ij} dx^i dx^j$ が与えられた多様体を

Riemann 多様体と呼ぶ.

Riemann 計量が対角型 $(dx^1)^2 + \dots + (dx^n)^2$ でない

\iff 空間がゆがんでいる.

Riemann 計量から, 空間の曲がり具合を表すテンソルが誘導される:

$$R^l{}_{ijk} := \frac{\partial \Gamma^l{}_{ki}}{\partial x^j} - \frac{\partial \Gamma^l{}_{ji}}{\partial x^k} + \sum_{m=1}^n (\Gamma^l{}_{jm} \Gamma^m{}_{ki} - \Gamma^l{}_{km} \Gamma^m{}_{ji}) \quad (\text{曲率テンソル})$$

$$R_{ij} = \sum_{k=1}^n R^k{}_{ikj} \quad (\text{Ricci 曲率})$$

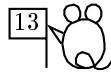
$$R = \sum_{k=1}^n R_{kk} \quad (\text{スカラー曲率})$$

特に, M が \mathbf{R}^3 内の曲面で, g が \mathbf{R}^3 の Euclid 距離から

自然に誘導された計量の場合は, $R = 2K$ となる.

このように座標成分で書くと, テンソルになることを調べるだけで大変!

接続の幾何学 — intrinsic な表現法



現代微分幾何学では、測地線は最短経路としてのよりも
平行移動の基準としての方が本質的

接続の理論はファイバーバンドルの概念を用いてきれいに説明されるが、
ここではベクトル場だけで説明する

アフィン接続：多様体 M 上の C^∞ 級ベクトル場の全体を $\mathcal{X}(M)$ と置く。
写像 $\nabla_Y X : \mathcal{X}(M) \times \mathcal{X}(M) \rightarrow \mathcal{X}(M)$ が次の条件を満たすとき、
 M 上のアフィン接続と呼ぶ。

- 1) $\nabla_{Y_1+Y_2} X = \nabla_{Y_1} X + \nabla_{Y_2} X$ (Y に関する線型性)
- 2) $\nabla_{\varphi Y} X = \varphi \nabla_Y X$ (φ は M 上の函数)
- 3) $\nabla_Y (X_1 + X_2) = \nabla_Y X_1 + \nabla_Y X_2$ (X に関する線型性)
- 4) $\nabla_Y (\varphi X) = Y(\varphi)X + \varphi \nabla_Y X$ (φ は M 上の函数)

共変微分 ∇ は定義から明らかに (1, 2) 型のテンソルとなる。
ベクトルの平行移動とは、共変微分が 0 となるような動かし方のことと定める。

接線ベクトルが常に平行 i.e. $\nabla_{\varphi'(t)} \varphi'(t) = 0$ を満たすような曲線を
測地線と呼ぶ。

局所座標を導入すると、Christoffel 記号が

$$\nabla_{\partial/\partial x^i} \frac{\partial}{\partial x^j} = \sum_{k=1}^n \Gamma_{ij}^k \frac{\partial}{\partial x^k}$$

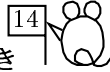
で定まり、測地線の方程式 $\ddot{\varphi}^k(t) + \sum_{i,j=1}^n \Gamma_{ij}^k \dot{\varphi}^i(t) \dot{\varphi}^j(t)$ が得られる。

\mathbb{Q} 上の Γ_{ij}^k を定義する共変微分の公式は、前に導いたものと
 i, j が入れ替わっている。前の議論では Γ_{ij}^k は i, j につき対称だったので
これはどうでも良かったが、一般には対称と限らないので、慣用の定義に
従っておく。

なお、測地線の方程式は Γ_{ij}^k でも Γ_{ji}^k でも同じものになる。

振率テンソル：

X, Y : ベクトル場, ω : 1 次微分形式 (共変ベクトル場) のとき



$$\langle T(X, Y), \omega \rangle := \langle \nabla_X Y - \nabla_Y X - [X, Y], \omega \rangle$$

ここに, $[X, Y] = XY - YX$ はベクトル場の交換子積で, 二つのベクトル場から新たなベクトル場を作り出す.

局所座標で $X = \sum_{i=1}^n \xi^i \frac{\partial}{\partial x^i}$, $Y = \sum_{i=1}^n \eta^i \frac{\partial}{\partial x^i}$ とすれば,

$$[X, Y] = \sum_{j=1}^n \sum_{i=1}^n \left(\xi^i \frac{\partial \eta^j}{\partial x^i} - \eta^i \frac{\partial \xi^j}{\partial x^i} \right) \frac{\partial}{\partial x^j}$$

曲率テンソル：

X, Y, Z をベクトル場, ω を 1 次微分形式 (共変ベクトル場)

とするとき

$$\langle R(X, Y)Z, \omega \rangle := \langle \nabla_X \nabla_Y Z - \nabla_Y \nabla_X Z - \nabla_{[X, Y]} Z, \omega \rangle$$

この intrinsic な定義から, T が (1, 2) 型, R が (1, 3) 型のテンソルであることが直ちに分かる.

$\nabla_{\partial/\partial x^i}$ を $\frac{\partial}{\partial x^i}$ と対比してみれば, これらのテンソルが空間のねじれ具合を表すことも想像できる.

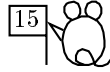
Christoffel 記号を用いてこれらを成分表示すると,

$$T\left(\frac{\partial}{\partial x^i}, \frac{\partial}{\partial x^j}\right) = \sum_{k=1}^n T^k_{ij} \frac{\partial}{\partial x^k}, \quad T^k_{ij} = \langle T\left(\frac{\partial}{\partial x^i}, \frac{\partial}{\partial x^j}\right), dx^k \rangle = \Gamma^k_{ij} - \Gamma^k_{ji},$$

$$R\left(\frac{\partial}{\partial x^i}, \frac{\partial}{\partial x^j}\right) \frac{\partial}{\partial x^k} = \sum_{l=1}^n R^l_{ijk} \frac{\partial}{\partial x^l},$$

$$R^l_{ijk} := \frac{\partial \Gamma^l_{ki}}{\partial x^j} - \frac{\partial \Gamma^l_{ji}}{\partial x^k} + \sum_{m=1}^n (\Gamma^l_{jm} \Gamma^m_{ki} - \Gamma^l_{km} \Gamma^m_{ji}) \quad (\text{先の計算と同じ結果}).$$

アフィン接続としての Riemann 接続



Riemann 計量 g は、反変ベクトル空間上の対称双一次形式 $((0, 2)$ 型テンソル) :

$$X = \sum_{i=1}^n \xi^i \frac{\partial}{\partial x^i}, Y = \sum_{i=1}^n \eta^i \frac{\partial}{\partial x^i} \text{ に対し, } g(X, Y) = \sum_{i,j=1}^n g_{ij} \xi^i \eta^j$$

特に, $g_{ij} = g\left(\frac{\partial}{\partial x^i}, \frac{\partial}{\partial x^j}\right)$

テンソルの共変微分: ベクトル場に沿うテンソルの変化率のことである.
計量テンソル g を例に説明する.

接ベクトル X 方向の測地線に沿う平行移動を $\tau(t)$ と書けば,

$$\begin{aligned} (\nabla_X g)(Y, Z) &= \lim_{t \rightarrow 0} \frac{\tau(t)^{-1} g(t)(Y, Z) - g(Y, Z)}{t} \\ &= \lim_{t \rightarrow 0} \left\{ \frac{\tau(t)^{-1} [g(t)(\tau(t)Y, \tau(t)Z)] - \tau(t)^{-1} [g(t)(Y, \tau(t)Z)]}{t} \right. \\ &\quad + \frac{\tau(t)^{-1} g(t)(Y, \tau(t)Z) - \tau(t)^{-1} g(t)(Y, Z)}{t} \\ &\quad \left. + \frac{\tau(t)^{-1} g(t)(Y, Z) - g(Y, Z)}{t} \right\} \\ &= \lim_{t \rightarrow 0} \frac{\tau(t)^{-1} g(t)(Y, Z) - g(Y, Z)}{t} + g(0) \left(\lim_{t \rightarrow 0} \tau(t) \frac{Y - \tau(t)^{-1} Y}{t}, Z \right) + g(0) \left(Y, \lim_{t \rightarrow 0} \tau(t) \frac{Z - \tau(t)^{-1} Z}{t} \right) \\ &= X(g(Y, Z)) - g(\nabla_X Y, Z) - g(Y, \nabla_X Z) \end{aligned}$$

Levi-Civita 接続では、これは 0 となる :

最後の式が X, Y, Z につき多重線型なので、次を確かめれば十分である :

$$\begin{aligned} \frac{\partial}{\partial x^k} \left(g\left(\frac{\partial}{\partial x^i}, \frac{\partial}{\partial x^j}\right) - g\left(\nabla_{\partial/\partial x^k} \frac{\partial}{\partial x^i}, \frac{\partial}{\partial x^j}\right) - g\left(\frac{\partial}{\partial x^i}, \nabla_{\partial/\partial x^k} \frac{\partial}{\partial x^j}\right) \right) \\ = \frac{\partial g_{ij}}{\partial x^k} - g_{lj} \Gamma_{ki}^l - g_{il} \Gamma_{kj}^l = \frac{\partial g_{ij}}{\partial x^k} - \Gamma_{j,ki} - \Gamma_{i,kj} = 0 \end{aligned}$$

また, Γ_{ij}^k の i, j に関する対称性により, $\Gamma_{ij}^k = 0$.

逆も成り立つことが知られている :

定理 Levi-Civita 接続は, $\nabla g = 0$ かつ $T = 0$ を満たすアフィン接続として、一意に定まる.